

神学からの遺伝子工学に対する応接

——金承哲著『神と遺伝子』——

竹 田 純 郎*

1 クローニングをめぐる問い

スコットランドのロスリン研究所は1997年2月23日に、「ドリー」という名のクローン羊を一般に公開した。それは、自然生殖に由らないで、人工的な操作によって生命体が誕生したという事実であったから、一般の人々を吃驚させたばかりか、神学に真剣な応接を迫るものであった。金承哲氏（以下、敬称略）の『神と遺伝子』（教文館 2009年3月刊）もまた、そうした神学的応接である。なぜなら「ドリー」の誕生は、同じ哺乳類である人間の複製、つまりヒトクローンをもたらすことになるかもしれないし、そうなれば、被造物の創造という自然もしくは神の域が現代科学によって侵犯されてしまうかもしれないからである。それゆえ、ヒトクローンの是非をめぐる宗教的ないし神学的問題が触発され、神・人間・自然についての従来の理解が根本的に問われることになったのである（『神と遺伝子』19頁、以下頁数のみ表記）。

こうした問いに答えてゆくために、金は、クローンとは一つの分子、細

* 金城学院大学教授

胞、動植物、人間の遺伝子のコピーのこと、クローニングとは、無性生殖で、一つの個体から遺伝子が完全に同じ個体を作る技術のこと、と「クローン」と「クローニング」に関する基本的事項を確認している(20)。

問題はクローニングである。実際、クローニングがあつて初めて、クローンが製作される。それは、従来の農業における「育種」の技法を、人間を含めた生命体全体にまで適用した技術であるが、まさにそれゆえに生命界の全域を制御する可能性を手にしたわけである(25)。金は、クローニングの問題を二つ挙げる。第一は、「遺伝子決定論」の問題である。「ヒトクローン」は遺伝子が同じ個体である。とすれば、遺伝子の同一性が人のアイデンティティであるのか、どうか(35)。第二は、「生殖と治療」の識別の問題である。ヒトクローンの誕生は人口を加減することもできる。とすれば、人の誕生を制御する「生殖用クローニング」と、治療目的とした「治療用クローニング」とを、どのように識別するのか。後者のみか、前者をも合法とみなすのか(43)。

神学は、クローニングに対してどのように応接するのか。具体的にいえば、クローニングを全面的に否認するのか。だとすれば、神に代って被造物を創造してはならないから、「神を演じてはならない」ことになる。その逆に、全面的に承認してよいのであれば、「神を演じよ」ということになる。それとも、条件つきで承認するのであれば、被造物の創造に疑問符を付けることになるから、「神を演じるのか」という応答になる。金の著書の展開を導いてゆくのが、こうした問いである。

2 クローニングに対する三つの神学的応接

神を演じるのかどうかに関して、アメリカでは三つの神学的応接がある。金は、これらの立場に論評を加えている。

金は、まず**P・ラムジー**、**カトリック教会**、**H・ヨナス**等の「神を演じてはならない」とする神学的立場を取り上げる。

ラムジーは、神が「価値の無限な中心」であるかぎり、人間が「神を演じる」ことは「驕慢」であるし、ひいては神に基づく人間の「聖性」に対する冒涇となると論ずる(115, 119)。それゆえ出産は、技術に還元されえない「生殖の神秘」を示すのに対して、遺伝子工学的操作は澆神だ、と断じている(122, 125)。**カトリック教会**もまた、神を源とする自然法の見地から、ヒトクローンを否認する。なぜなら、人格の尊厳が「神の似姿」にあるのに対して、ヒトクローンは人格の尊厳を軽視するからである(141, 144)。同様に**ヨナス**も、カトリック的な自然法に類似した「創造の秩序」を護るべきだという立場からして、遺伝子工学的介入を自然の客観的秩序への反逆として反対する(155)。

見られたように、これら三者は共に、生命操作に対する倫理的判断の論拠を自然法的な存在秩序に置いている。それゆえ金は、「神を演ずるな」という神学的応接の論拠が「超越神の主権」と「存在の大いなる連鎖」にあること、これらの論拠がコインの裏表のような関係にあること、また種の不変性、それに含まれた遺伝子の同一性は「存在の大いなる連鎖」という思想と連携していることを指摘している。ところがダーウィンの進化論の登場によって、この思想が動揺を来たした以上、十分な論拠たりえないと言う(78, 104, 240)。そのうえで、一連の疑問点を挙げる。「神を演じてはならない」というのは、「クローニングに対する十分な制裁」にはならず、ヒトクローンが暫定的に可謬性を持ちうるという警告に留まるのではないか(84, 86)。クローニングが「非自然的」出産方式だと認められるにせよ、それが「非人間的」方法だと断言できるのか。それが治療行為である限り、「人間的」方法ではないのか(134)。人格の尊厳は、「自然的」出産のみに依るのだとすれば、遺伝子の同一性に依ることにならないか(150)。否、それに留まらずに、キリスト教倫理の基盤は、自然法的な

存在秩序の中ではなく、神が世界の完成へと向けて新しいものを継続的に創造してゆく「未来への開放性」に求められるのではないか。そして、自然は、その「継続的創造」の力動的な場であり、人間はその中で神の創造活動の協力者であるのではないか、と（155）。

金は、続いて、「神を演じよう」と鼓舞するフレッチャーの立場に言及する。

この立場は「人間の条件」をコントロールしつつ、果敢に「神を演じる」試みである。それゆえラムゼー等の警告と真っ向から対立し、その警告は「～すべからず」という禁止命令を遺伝子工学に無批判的に適用した遺伝子決定論だと指摘するものである（195, 198）。

フレッチャーは、「よい倫理はよい手段だ」と考えるから、人間社会の必要性という基準に従って、クローニングをも判断する。すなわちクローニングは、人間の生殖を効果的にコントロールすることにより人間の自由を拡張し、人間の生を自ら選択させるから、より人間的である、と（199, 201）。こうした見解は、キリスト教的信仰がなくても妥当性をもちうるヒューマニズムであり、「神の死の神学」を受け継いだ状況倫理である（208, 210）。

金によれば、フレッチャーは、「古い神の死」という現代の精神的状況を徹底的に自覚し、そうした神不在の状況の下で、人間が責任を負い、その中で新しい神に出会うと論ずる（216）。フレッチャーは、「信じるに値する神とは、人間の幸福のために最も可能なことを目指す」と言う。新しい神という観念は「功利主義」の性向を含んでいる（217）。それゆえ彼は、進化論的世界観と柔軟に対話を行っているが、その進化論理解は彼の状況倫理を裏づけるための人間中心的なものである（230）。

そして金は、R・ターナー、T・ピーターズ等の「神を演じているのか」

という疑問形でもって、ヒトクローンに条件付きで支持する神学的立場を検討している。

ターナーの判断基準は、クローニングが「神の創造活動への協力」であるかどうかという点である。例えば、育種から生命体の遺伝子への介入に至るまで、古来、人間は「意識的・意図的」に自然に関わっているが、遺伝子工学は、旧来の農業の改善でありながらも、新しく危機をもたらす。つまり自然の中で発生しているものの操作であるが、ある特定の目的の下で変化を引き起こし、その結果、「環境に対する意図しえない大損害を与える」とターナーは警鐘を鳴らす。遺伝子工学が生物学的知見を増加させようとも、その知が何を意味するかは、科学には答えられないのである(162-3)。

「神の創造活動への協力」が、倫理的判断の鍵を握る。神は、被造物における遺伝子的変化を促すために、自然のプロセスに介入し、さらに人間の遺伝子工学的行為を通して働くがゆえに、人間は、神と共に創造活動に携わりつつ、神の救いを待ち望む(164)。だが遺伝子工学は放縦で破壊的な目的のため使われてはならないのであり、遺伝子工学の目標は治癒し、取り戻し、保護することに制限されなければならないのである(167)。「イエスが憐れみ深い治療者」(170)であるということは、イエスが自然のものを単に好ましいとするのではなく、必要とあれば自然を直そうとしたことに表されるのである。

ピーターズの判断基準は、終末論的性向を備えたものである。したがって希望のヴィジョンに即して現実に対して働きかけるかどうか判断の鍵を握る(188)。それゆえ、彼の終末論的な「先取りの倫理」は三つの要素からなる。第一に、現在の人間の尊厳は、将来的に神によって肯定され確定されることに依る、たとえ遺伝的障害のある子どもであれ、その価値は遺伝的価値を超えて、「神的計画」の中で永遠の価値をもつということ。第二に、人間の尊厳は、先取りの倫理によって実現され、その未来性向に

より、人間は歴史の中で新しいものを積極的に受け取ることができるということ。第三に、自然の恣意性（遺伝的奇形）は、人間にとってはやアリバイではない。未来のための人間の責任は、神が意図した形で「人間を演じる」ことで全うすることができるということである（191）。

こうした倫理に基づき、第一にラムジー等の立場に抗して、「ヒトクローニングは慎重であるべきだが、非倫理的とは言えない」と判断される。人間のアイデンティティは、神と人間の関係においてあり、決して遺伝子によって決定されるものではないがゆえに、クローニングによって生まれる人も、伝統的出産による人も、神の前で生き、神の恵みで授かるべき人である（174）。第二に「遺伝子決定論」に抗して、「人間の魂は、人間の製作でも物質でもなく、人間が神との関係であるということそれ自体であるから、遺伝子による決定を絶対視してはならない」とする（183）。ピーターズからすれば、人間は、自然によって決定されていて同時に自由な存在であり、人間の自由とは、自然からの逸脱に求められるのではなく、人間が神との関係によって成立することに求められるのである（185-6）。

以上のように、金はターナーやピーターズに対する論評を加えている。それが好意的な論評であることは、論を俟たない。

3 金の神学的応接

科学と神学との関係に対する金の基本的構えは、ピーターズのいう「仮説的共鳴」から想を汲んだものであろう。ピーターズによれば、生物学と神学との関係は「仮説的共鳴」のそれであり、両者は、何の葛藤も起さないものでもないし、一方が他方に止揚されなければならないものでもない。両者が共に探し求める領域が「相応」するという「仮説」から始め、互いに開放的な態度を護って、自らの主張を、以後の探究と可能な確証と反論に対して開放するというのである（58）。

金は、「仮説的共鳴」の関係に依拠するから、既存の神学的倫理のパラダイムを脱構築しなければならない。それゆえ既存の教義に基づいて、ヒトクローンの是非に関して答えを提出するよりも、問いを投げ掛けてゆくという批判的作業を続けてゆかなければならない。つまり、ヒトクローンという「否定的なもの」を一蹴するのではなく、その「否定的なもの」の傍らに留まるのである。なぜなら、科学化された現代世界に留まらざるをえないのが現代の人間の境涯であるからである（72, 74, 77）。

金は、ラムジー等が「神を演じてはならない」とする論拠、すなわち「存在の大いなる連鎖」という論拠、それと連関した「種の恒久の本質」という論拠を是としえない。端的に言えば、金は「存在の大いなる連鎖」を排して、「進化論的世界観」に傾く。それゆえフレッチャーやピーターズと同様、進化論的世界観と柔軟に対話を行なう。この点でも、ピーターズに与して、キリスト教的事象と進化論とを結びつけて、進化論的パラダイムとの共存可能性を探っている（231）。

金は、既存の神学的倫理の脱構築からして、ヒトクローニングに対する条件付き支持に回るのではないか。つまりそれは、科学の営みがいわゆる神の全能性や神秘の領域を侵してもいないし、人間の恣意性に全てを委ねてもいないとせざるをえなくなろう。

金は、ピーターズと同様、ヒトクローンの試みが新しい人間性の出現をもたらす可能性として慎重に見極められるべきだとする。その点で、ラムジーの倫理と、フレッチャーの倫理を越えて、「創造された共同創造者」たる人間理解は、「神を演じるな」、「神を演じよ」の両極を止揚し、遺伝子工学を神学的に受け止められるとする（232）。私たちに要求される倫理的態度は、遺伝子操作を禁ずることでもなく、遺伝子操作のプロメテウスでもなく、両方の決定論を排することだとする（234）。

金は、「治療用クローニング」のみか「生殖用クローニング」をも是とするのか。金の応接に動揺が見られはしないか。まず彼は、医療の現場では、医師が神を演じてもよいかどうかが問題となるとしたうえで、自然の流れに逆らう医療行為も、自然の流れのままに放置する医療行為も、「神を演ずる」行為として批判されるのかどうか、と問う（95）。一方で、人間も自然も「健常」より「歪曲される」限り、神による救いを待ち望むという点で未来開放的であるというピーターズの立場が可能だ、と言う（233）。だが他方で、慈善に使える科学とは、「神の共同創造者」たる人間が自由に責任を負って、「人間を演じる」ことであり、「治療とは、神が神を演じるように神を演じることだ。だが遺伝子治療は、大部分の場合、いまだ遠い希望である」というハーベイに言及している（235, 237）。

金は、クローニングという遺伝子工学的試みのなかに、異種のものとの共生を開く可能性を探る。DNAをめぐる遺伝子工学的議論は、神学における言わば「人間学的転換」からの更なる「転換」を要請していると看做し、その「転換」を人間の内部的脱中心化の極限として評価する。DNAは、人間と他の生命体との親類関係を暴露することにより、人間の自我の脱構築をもたらすというわけである（245, 247）。

金は、脱中心化を「自己超越の一つのモチーフ」、つまり新しい人間理解をもたらす契機と解する。一方で、ヒトクローンが投げ掛けるのは、果たして私たちが「他の存在との連続性」の中で自己のアイデンティティを見出す用意があるのか、という問いであり、他方でヒトクローンは、既存の自然的状態や社会的観念を神聖視する態度を非神話化するという点で、宗教的意義を保持すると言う（251-2）。

金によれば、こうした「自己超越」は、人間が「神の協力者」になることにより人間となることを意味すると同時に、人間が自分以外の生命体との共存を求めることにより人間になるということを暗示する。人間は、神

の前で、神との関係のなかで、生きているものであると同時に、すべての生命体との連帯のなかで生きているものである（252）。

4 規範の溶解——金の神学的応接に対する批判的言及——

一般的に、健康と病気との間に、明確に境界線を引くことができない。とすれば、なおさら遺伝子治療の対象となる症状と、そうでない症状との間に、どのような境界を設けるのであろうか。金が、クローニングに対する神学的応接のなかで、「治療用クローニング」に対してさえ、一種のためらいのような感情を交えているように見受けられるのも、健康と病気とを区別する規範が溶解している事情を示しているのではあるまいか。

われわれがイヌとネコとを、あるいはイカとタコとを識別することができるように、一般的に「類」の概念は、「類型 (Typ)」の概念の一つとして、さまざまな諸存在者を識別する機能——識別する規範の機能——を持っているものである。金が、「存在の大いなる連鎖」の思想を論じたさいに、類の恒久の本質を批判しているが、類の持つ存在指示の機能を退けるあまりに、類の識別機能を見落しているのではあるまいか。この点にも、規範の溶解現象が見られるのではあるまいか。

金は、ピーターズのいう「先取りの倫理」に言及したとき、「人間の尊厳は、先取りの倫理によって実現され、その未来性向により、人間は歴史の中で新しいものを積極的に受け取ることができる」と述べた。その場合、新しいものとは何か。それはヒトクローンを指すのであるか。新しい人間が悔い改めた者を指すのであれば、神学的な意味での新しい人間と、遺伝子工学的試みにおける新しいものとは、どのように繋がるのか。この点にも、新と旧とを識別する規範の溶解現象が見られはしないか。

金のヒトクローニングに対する神学的応接のなかには、このような溶解現象が見られる。そうは言っても、現代の思想状況は規範や価値の秩序体

系の溶解が進行している状況である。だからこそ、金は果敢にこの状況に立ち向かうであろう。この書評は、金に対する連帯の挨拶である。